

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPOINT
2011.2. VOL.14

contents

極 研究&教育
Current topics in research and education

人 時の人
People in the news

楽 学生生活
Campus life

技 最新医療の紹介
Latest developments on the medical front

和 お知らせ
Information

エコチル、はじまる!



“エコチル”調査をご存じですか?広義の環境を意味する“エコ”と、子どもの“チルドレン”から作られた造語です。近年、不妊・流産、先天性異常(ダウン症など)や神経系異常(自閉症、発達障害など)、児童のぜん息・アトピー性皮膚炎など、子どもの健康を取り巻く状況が変わりつつあります。

このような背景を受け、環境省は1/24(月)から、全国10万組の親子を対象に、子どもの病気や健康に環境中の化学物質が与える影響を妊娠段階から調べる「エコチル調査」を全国15カ所の拠点で開始しました。本調査では、お母様のお腹の中にいる胎児期から13歳になるまで、医療と環境の専門家が子どもの成長・発達を見守りながら定期的に健康状態を調査します。

愛知県では、本学に設置された名古屋市立大学エコチル調査愛知ユニットセンターが拠点となり、調査対象地域である名古屋市北区、一宮市の医療機関にご協力を頂き、1/31(月)より各医療機関にて順次募集を開始しました。今後3年間で愛知県内では6,000組の親子を募集する予定です。

調査参加者の方には、調査内容の説明および同意書を頂いた後、薬剤などの化学物質や喫煙、食習慣、既往歴などの質問票に回答頂くほか、妊婦検診時に併せて採血・採尿などをさせて頂き、体内の化学物質を分析します。出産後は母子の血液や毛髪、母乳などの採取の他、半年に1回程度質問票に回答頂くほか、面接調査なども予定されています。

子どもの健康に影響を与える要因を明らかにし、次世代の子どもたちへ安全・安心な未来を引き継ぐために、医療機関・行政・大学そして地域社会が連携してこの課題解決に取り組みます。

どうぞ皆様のご支援ご協力のほど、よろしくお願いいたします。



県内で最初に参加者の募集を開始した西部医療センター城北病院(2011/1/31)。メディア取材に対応する第二産婦人科副部長西川尚美医師(写真上)。エコチル調査参加協力のおかげで行うリサーチコーディネータ永田里子看護師(写真下)。



名古屋市立大学
エコチル調査愛知ユニットセンター
母と子どもの健康・環境総合研究センター

詳しくはHPを
ご覧ください

詳しくはホームページをご覧ください

エコチル愛知

検索

<http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/eecoichi>

“瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPOINT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

連携病院

連携病院 — 地域医療を担う拠点・中核病院

蒲郡市民病院 — Q:病院の特色は?



当院は平成9年10月に新築移転し、13年が経過しているところです。許可病床数は一般病床382床、診療科目は22診療科です。病棟看護基準においては7対1入院基本料を確保し、東三河南部医療圏の拠点病院として地域医療を守っています。

名古屋市立大学から派遣されているのは、まず循環器内科は早川副院長をはじめ5名、皮膚科2名、脳外科も杉野副院長を中心に4名、小児科も4名の医師が活躍しています。さらにこの春からは、消化器内科にも医師を派遣していただく予定です。初期研修医も現在名市大卒が2名在籍、そして春からまた2名が名市大から来て仲間になる予定です。(全3名)

市大学生の実習も活発に行われていますが、こちらも科の垣根を超えたアットホームな実習が売り物です。名古屋からそう遠くはありません。環境も素晴らしい当院へぜひ一度見学に来てください。

蒲郡市民病院 院長 河辺 義和

市立四日市病院 — Q 病院の特色は?

当院は、三重県北勢地方人口83万人の中で、最大の中核病院として、急性期高度専門医療と地域完結型の医療を目指しています。病床数は568床、診療科目は25診療科で、7対1看護体制をとっています。特に、救命救急センターは多忙で、年間6,000台の救急車を受入れ、手術は年間約2,000例、循環器科の心臓カテーテルも年間1,300例を数えます。

現在、病院の増改築を行っており、最新鋭の12の手術室を備えた8階建ての新病棟が来年度完成予定で、旧病棟、外来はすべてリニューアル予定です。

名古屋市立大学からは、坂部長の下9名の小児科医、産婦人科には辻部長の下、6名の産婦人科医、2月からは日大から産婦人科の准教授も参加予定で、総合周産期センター開設を予定しています。多忙な臨床の中で、アカデミックな病院、ここで働きたい、ここで診療してもらいたい病院となるべく、努力してまいります。

市立四日市病院 院長 伊藤 八峯



市立四日市病院、リニューアル後の平成25年度完成予想図

教育

解剖感謝式 — 11月30日

医学部2年生のメインイベントは、秋から始まる解剖実習です。解剖感謝式は、医学教育の為に献体していただいた方々への感謝を表し、医学を志す気持を新たにす式典。毎年この時期に行われます。

平成22年11月30日(火)本部棟4階ホールにおいて平成22年度解剖感謝式が執り行われました。式には、ご遺族の方々、財団法人不老会理事長ならびに役員の方々、戸部学長をはじめ教職員並びに関連病院の方々、肉眼解剖学実習中である医学部2年生、看護学部学生代表者等、多数参列いたしました。

学生を代表して2年生の中谷優子さんが感謝の言葉を述べ、肉眼解剖と病理解剖あわせて被解剖者152名のご芳名が奉読されました。そして参列者全員で献花をおこない、最後に白井医学部長が御礼の言葉を述べ、解剖感謝式は厳粛なうちに終了いたしました。

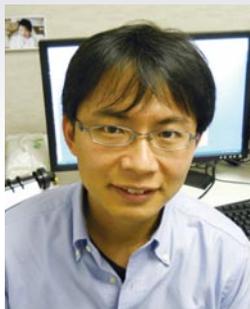
医学部2年生がおこなっています肉眼解剖学実習は医学専門教育の原点であり、この実習を通じて、学生は、人体解剖学の知識のみ習得するのではなく、長期間にわたってご遺体と向き合うことで、献体された方の意志、そしてご遺族の気持ちにも思いをめぐらせながら、良き医師になるためには、何が必要かを学んでいます。

(機能解剖学 教授 池田一雄)



上 : 感謝の言葉を読み上げる 学生代表 中谷優子さん。
中央: 式典会場。出席者が献花を行います。
下 : ご出席いただいたご遺族、不老会の皆様へ御礼の言葉を申し上げる 白井智之 医学部長

研究者紹介



Hiroshi
Kitamura

北村 浩(きたむら ひろし) 病態モデル医学(准教授)

専門:免疫学、分子病態生物学

マクロファージは1863年von Recklinghausenにより初めて記録され、1892年Metchnikoffによって命名された研究の歴史の古い免疫細胞です。近年、2型糖尿病や粥状動脈硬化症などメタボリックシンドロームの進行に慢性炎症反応が深く関わっていることが明らかになり、マクロファージの役割が再注目されています。私はこれまでマルチオミックスの手法を駆使し全く新たなマクロファージの機能分子を複数見出しています。本学ではこれらの分子のマクロファージ特異的な遺伝子改変マウスを作成し、炎症疾患やメタボリックシンドローム発症における役割を個体レベルで明らかにしたいと考えています。

近年の論文:Sci. Transl. Med. 2, 17ra9 (2010), Immunity 33, 71-83 (2010), Nat. Cell Biol. 11, 1427-1432 (2009), Nat. Immunol. 10, 872-879 (2009), J. Exp. Med. 205, 1807-1817 (2009)



Yoshino Uzuki

植木 美乃(うえき よしの) 神経内科学(助教)

専門:臨床神経生理学、神経科学

パーキンソン病はアルツハイマー病に次いで2番目に発症頻度の高い変性疾患であり、高齢化社会を迎え、今後その頻度はますます増加すると考えられています。パーキンソン病では、脳内のドーパミン作動性神経の働きが悪くなるため、新しい運動技能の習得や強化(運動学習)がうまくできないことが知られております。そのためリハビリテーションに対する抵抗性や長期的な運動機能の低下を引き起こし、生活予後に大きな影響を与えます。我々は、経頭蓋磁気刺激法と運動学習課題とを組み合わせた新しいリハビリテーションを開発し、ドーパミン作動性神経の働きを促進させると同時に、脳に長期的な可塑性変化を誘導する臨床研究を行っております。

近年の論文:The Journal of Neuroscience 30: 11529-36 (2010), Movement Disorder 25 2148-55 (2010), Journal of Neurology 257: 653-4 (2010), Clin Neurophysiol 121 90-3 (2010), The Journal of physiology 587: 4629-44 (2009), Brain 132 :749-55 (2009), Journal of Neurosci 280: 123-6 (2009), Neuroimage 36: 1301-12 (2007), The Journal of Neuroscience 26: 8523-30 (2006), Annals of Neurology 59: 60-71 (2006)



Masaki Imai

今井 優樹(いまい まさき) 免疫学(講師)

専門:免疫学

近年、分子標的治療薬の代表的な物としてヒト型抗体がすでに医薬品として認可されています。抗体医薬品は抗原特異性及び親和性が高く、本来生体内に存在するため無毒で副作用が少ないのが特徴です。また、多種多様な抗原に対して高親和性を持つための技術や、遺伝子組み換え技術の進歩により、多様なターゲットにも対応でき、テラーメイド的な医薬品としても期待されています。我々は、癌、感染症及び自己免疫疾患に対する特異的治療法の確立のため、新規抗体開発や抗体の可変領域と補体制御系タンパクを組み合わせた新規遺伝子組み換えタンパクを作製し、抗体と補体を駆使した分子標的治療薬の開発を進めています。

近年の論文:Microbiol Immunol in press (2010), Intens Care Med in press (2010), Biol Pharm Bull 33:1256-9 (2010), Am J Physiol Renal Physiol. 298: F721-733 (2010), Cancer Res 68: 6734-42 (2008), Cancer Res 67: 9535-41 (2007)



Takeshi
Sugiyama

杉浦 健之(すぎうら たけし) 麻酔・危機管理医学(講師)

専門:麻酔、ペインクリニック、集中治療

“痛み”による就労困難、医療費の浪費、介護費用などによる社会経済の損失は非常に大きいと推定されています。そのような医学的、社会的背景から、慢性痛への対応は今や世界的な潮流となりつつあります。米国では2000年に、痛みをめぐる様々な問題に国家的規模で取り組むことを表明し、「痛みの10年」(Decade of Pain Control and Research,2001-2010)宣言を採択しました。われわれの研究室では、発現系や動物モデルを用いて、主に電気生理学的手法による研究を行い、病態時の痛みのメカニズムを研究してまいりました。今後は臨床に向けての応用も重要であると考えております。

近年の論文:J Anesth 23:67-74(2009), Anesthesiology 110:1199-200(2009), Anesth Analg 109:754-9(2009), Am J Physiol Cell Physiol 292:C1768-74(2007), Acta Anaesthesiol Scand 50:1304-5(2006), J Anesth 20: 253-4(2006), Anesthesiology 104:1113(2006), J Anesth 20:106-8(2006), J Neurosci 25:2617-27(2005), J Neurosci 24:9521-30 (2004)

新任教授のご紹介

細胞生理学 — 橋谷 光教授

Q:今後の抱負をおねがいします。

昨年11月1日付で細胞生理学分野を担当させて頂く事になりました。九州大学時代からの恩師である前任の鈴木光名誉教授の下、平成5年に本学大学院に入学し、途中4年半の在外研究期間を含めまして今年で名市大での18年目を迎えました。

専門は平滑筋とその周辺細胞(自律神経、間質細胞など)の機能的な研究で、電気生理学、細胞内カルシウムイメージングそして収縮力測定が実験手法の3本柱です。平滑筋臓器・組織には自動性を有するものが多く、生体内環境に応じて周辺細胞からの情報入力により自動運動のリズムと強度を変化させることにより臓器特異的な生理機能を果たしています。従いまして平滑筋機能を理解するためには分子・細胞レベルの情報を組織・臓器レベルで統合する事が不可欠であり、分野名は細胞生理学ですが単離細胞よりは多様な細胞の機能的な集合体である組織を用いた研究が中心です。平滑筋の自動性に関する研究を進展させる一方、平滑筋以外の「自動性」との共通点と相違点を検討し、細胞リズムの異常に起因する病態解明の一端を担いたいと考えています。

本学の更なる発展のために研究、教育に全力を尽くしてまいりますので、今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



橋谷 光 教授

平成22年度医学教育等関係業務功労者表彰を受賞した 公衆衛生学 小柴 栄さんにお話を伺いました!

—医学教育等関係業務功労者表彰—

医学教育等関係業務功労者表彰は、大学における医学又は歯学に関する教育、研究若しくは患者診療等に係る補助的業務に関し顕著な功労のあった者を対象に文部科学大臣から表彰されるものです。



私は、昭和49年に名古屋市立大学医学部公衆衛生学教室へ勤務し、以後30数年、教室の教育・研究補助業務に携わって参りました。4人の歴代教授の下で、「自分には何が出来るか」を常に考えながら、先生方や研究者の方々の手助けになれるよう心がけてきました。

具体的には、特殊健康診断における血液・尿の分析をはじめ、講義資料の作成、実習の補助、調査・研究の補助、研究費の経理事務など、多岐にわたる教室の補助業務をさせていただくことができました。

このたび退職を前に、このような栄えある賞をいただくことができ、驚きと喜びで一杯です。凡庸な私をご指導・ご教示くださいました公衆衛生学分野の先生はじめ教室の皆様、ならびに長年にわたり支え励ましてくださった多くの皆様へ深くお礼を申し上げます。

これからもこの受賞に恥じる事のないよう、日々努力していきたいと思っております。

OB訪問

世界で活躍する市大人 — 樋口 雅也先生 (平成17年卒)

はじめに

多くの方々のお力添えと幸運が重なり、米国臨床研修を開始して間もなく4年が経ちます。昨年家庭医療科の研修を修了し、現在はフェロー(専門研修医)及びClinical Instructorとしてハワイ大学老年医学科に勤務しています。

世界との出会いから家庭医療研修

北米・欧州を旅し、英国ボランティアを通して世界を肌で感じた学生時代。世界の中の自分を強く意識するようになりました。選んだ道は米国家庭医療科での研修。新生児から高齢者、小外科手術から自然分娩、医学生の教育からホームレスのための検診など内容は多岐に渡りました。

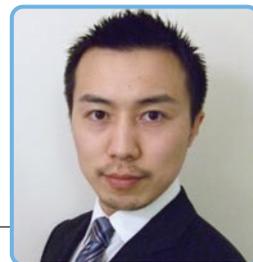
老年医療と教育リーダーシップ

超高齢化社会を迎え、老年医学を系統的に学ぶため現在の専門研修科を選択しました。“老いる”ことで生じる身体的変化に加え、複雑な精神的・社会的側面などを総合的にケアする診療科です。またフェローは医学教育リーダーになるための研修と研究課題に取り組みます。医学生・研修医に加え、コメディカル向けの継続教育も担当しています。

最後に

世界は目の前に広がっています。名市大が世界の中のハブ港になれるよう、様々な人を迎え、繋ぎ、送り出す場になってほしいと思っています。

【略歴】平成17年名市大卒。5年次修了後休学、イギリスにて児童福祉活動に従事。卒業後横須賀米海軍病院にてインターン。ECFMG Certificate取得。南イリノイ大学家庭医療科にて臨床研修修了。現ハワイ大学老年医学専門研修医(フェロー)及び医学部Clinical Instructor。米国家庭医療学会専門医。ハワイ州及びカリフォルニア州医師免許取得。Alfa Omega Alfa Medical Honor Society 会員。



樋口 雅也 先生

もっと知ろう、エイズのこと — HIV/エイズ知識普及イベント「Know more AIDS」

今年度の川澄祭では、『HIV/エイズ』について広く知っていただくことを目的にイベントが行われました。担当したM4伊藤桜さんにインタビュー！

Q. イベントとして企画しようと思った理由は？

昨年度の川澄祭で性感染症パートが新設されたことでHIV/エイズに興味を持ち始めた私は、自然と周囲にエイズについて話すようになり、ある時女子高生にも話をしてみました。すると返ってきた言葉は「エイズって何？」私は驚きました。エイズという単語すら知らない子がいるなんて…。若い世代に、エイズについて正しく知ってもらいたい！性の健康について考えてもらいたい！という思いから「Know more AIDS」を企画しました。

Q. 事前の広報に力を入れていましたよね。

新聞・出版社、ラジオ局など各メディアにプレスリリースし、私たちの熱い想いを伝えたところ、中日新聞、東海ウォーカー、ZIP-FMさんが興味を持ってくださり、記事にしてください、またラジオにも出演させていただきました。当日ステージ前に集まった人は約300人！プレゼンテーション、ゲストのライブ、そしてHIV陽性者を交えたトークとHIV/エイズについて楽しく正しく学び、多少なりともHIV/エイズが身近な問題となるよう企画しました。

Q. 会場は野外ステージでしたね、目的があつてのことですか？ HIV陽性の方はどういう経緯でご出席いただいたのですか？

今回私はこのイベントを野外ステージで行うことにこだわっていました。HIV/エイズという難しいテーマで、より多くの人にメッセージを伝えるためには、訪れた誰もが目にする場所「ステージ」でやるしかないと思ったからです。また、模擬病院内のSTDパートでもHIV/エイズを大きく取り上げ、展示やクイズをしました。

HIV陽性者の方は、看護学部の市川誠一先生からご紹介いただきました。LIFE東海というHIV陽性者団体を立ち上げ、予防啓発や差別偏見をなくすために、精力的に活動をしていらっしゃいます。今回の企画にあたり、実際HIV陽性者の声を聴きたいと思い、取材をさせていただいたことがきっかけでした。その時は出演していただくことは考えておらず、HIV陽性者の手記を朗読する予定でした。しかし、川澄祭まで2週間をきった頃、ご本人自ら「出演してもいいよ」とおっしゃってくださり、急ぎ朗読をやめて出演していただくことになりました。実際にHIV陽性者にお会いにすることで、他人事だった問題を、少しでも身近に感じてもらえれば…という思いからです。

私はこの企画を通して、HIV/エイズが抱える様々な問題を知ると同時に、性教育の大切さを再認識しました。日本は他の先進国に比べて性に対して消極的です。性について当たり前のようにオープンに話せる社会になっていくことを願い、これからもHIV/エイズの知識普及、性教育に携わってまいります。最後になりましたが、「Know more AIDS」を開催するにあたってご指導・ご協力くださった皆様、そして私を支えてくれた実行委員のみんな、本当にありがとうございました。

— 学生が自分達の感性で、声で伝えるイベント、今後も継続し、さらに深めていけるとよいですね。



当日の様子。会場いっぱい参加者を前にプレゼンする伊藤さん(左)。

特集・学生生活

夏休みも終わりに近づいたある日、編集部宛に瑞医読者の卒業生から1通のメールが届いた…今号は、ある名市大生のOBを訪ねてのひと夏の留学体験をご紹介します。



米国ボストンDana-Farber Institute, Harvard Medical Schoolの三田貴臣(H12年卒)と申します。いつも瑞医を楽しく拝見させてもらっております。実はこの8月に、名市大医学部3年に在籍中の永井秀人君がボストンに1ヶ月間の短期留学にいらっやっており、私の属する研究室で"Summer Student"という形で自主研修を行っています。これはHarvard Medical Schoolのプログラムの一環として行われているもので、実際にセミナーやミーティングに参加したり、研究にも一緒に携わっていただいています。学部学生として彼の体験は大変貴重な内容と思っておりますので、もしよろしければ瑞医への掲載をご検討いただければ幸いです。

昨年夏、僕はBoston留学という貴重な経験を得ることができました。

きっかけは1年生からお世話になっていた岡本尚教授の細胞分子生物学研究室でした。1年生から研究室へ通うようになったのは、将来研究をする時期もあるだろうと思い、基礎的な知識や手技等を学生のうちに学びたいと思ったこと、また、もともと、日本だけでなく海外の医療についても知りたいと思っていたので、留学生の方達と英語を使うことで、英語を勉強できると考えたからです。岡本尚先生の研究室は白血病や癌の研究もされており、大学入学前に薬剤師として勤務していた当時、血液内科のカンファレンスや緩和ケアチームに参加していたため、同研究室で勉強させて頂きたいと考えました。こうした経緯があり、同研究室出身の三田貴臣先生にお会いしてことで、海外の研究や臨床の実際、英語を学ぶべく、先生のいらっしゃるBostonの研究室にてお世話になることをお願いしました。

伺った研究室はHarvard medical school ,Dana-Farber Cancer Instituteでした。ここに、Summer studentとして短期留学しました。

留学して研究内容・現場を学べたのはもちろんですが、先生の平素からの非常に柔和なお人柄と、日々の研究に向かう真摯な姿勢や考えを、近くで聞き、感じられたことが、僕にとってはかけがえのないものであり、尊敬できる先生と巡り合えて本当に有難いことだと思っています。

研究所は、大きな病院が林立しているLongwoodという場所にありました。病院が集積しているにもかかわらず不自然にも見えたが、世界中から患者さんや研究者が集まるからこそ成り立っていることを知り、大変勉強になりました。

さらに、病院見学もできました。MGH※では救急外来、Shriner's Hospitalでは小児の熱傷手術をそれぞれ1日ずつ見学できました。アメリカの医療現場を目の当たりにできたのはこの上ない経験でした。

このような一つ一つが、そして海外に出られたこと自体が、他では得ることのできない勉強となりました。学生のうちにこのような体験をすることで、幅のある考え方ができるようになる一助となるのではないかと考えます。

今後も国内・海外の色々な側面を経験し、良い医療を提供できる素養を身につけられたら、と思っています。

また海外留学を考えている方がいらしたら、是非行動されることをお勧めします。日本で得られない経験とモチベーションを必ずや得てもらえると思います。

最後に、本当にお世話になった三田貴臣先生、岡本尚教授並びに細胞分子生物学研究室の方々、血液内科飯田真介先生、そして両親に、感謝の辞をこの場をお借りして申し上げます。 ※MGH= Massachusetts General Hospital (M3 永井 秀人)



左から三田先生、Dr.Kanki、Dr.Look(Boss) 右から二人目が永井君



shriner's hospitalにて Dr.Sheridan とともに

脳梗塞治療最前線「Time is Brain」

「Time is Brain」脳卒中の治療においてよく言われている言葉です。脳は虚血に対して非常にもろく、不可逆的な障害を受けやすい組織です。如何に脳梗塞による脳へのダメージを少なくするかは時間との勝負という一面があります。発症すぐの超急性期の治療はもちろんのこと、その後の急性期や回復期、維持期といった時期の治療を適切な施設でスムーズに行えるかどうかは脳梗塞治療の要になります。このために名古屋市立大学病院では主に脳梗塞の診療に当たる神経内科だけではなく、初期診療を行う救急部、血管内治療を行う脳神経外科、リハビリテーションを行うリハビリテーション部、また患者さんの社会的なことや転院について相談する地域連携室などが一体となって治療に当たっています。当院で行っている脳梗塞治療の最近の話題について述べさせていただきます。

●超急性期治療:rt-PA、Merciリトリーバー

発症3時間以内の超急性期脳梗塞に対して2005年10月よりrt-PA静注による血栓溶解治療が出来るようになり、これにより脳梗塞治療は様変わりしました。「Time is Brain」の考えの重要性が強調されたのです。rt-PA(アルテプラゼ)は脳の血管に詰まった血栓を溶かす薬品で、効果が出れば脳血流の再開により劇的に症状が改善するものです。しかし半面出血性の合併症が多いため適応が限られ時間が経った脳梗塞には投与できません。そのため如何に遅滞なく投与するかが重要なことになっています。当院では年数例とまだ適応症例は少ないものの、初期診療に当たる救急部と協力しながら神経内科にてこの血栓溶解治療を施行しています。また、2010年4月30日付けで厚生労働省の認可を受けて発症8時間以内の脳梗塞に対してMerciリトリーバーが使用できるようになりました。これは、遠位端にらせんループを有するワイヤー状の医療機器で、マイクロカテーテル内に誘導することにより頭蓋内動脈に到達可能であり、急性脳動脈閉塞の原因となっている血栓を回収するものです。当院脳神経外科にはこのような血管内治療に長けたスタッフがあり、この治療を施行することが可能となっています。

●教育:ISLS

脳卒中の治療に長けたスタッフがいたとしても、そこに患者さんが来るまでに時間がかかったとしたら、前述の治療はできません。もちろん、医師ばかりではなくコメディカルスタッフの協力も必要です。脳卒中の患者さんをはじめに診たものが、無駄なく初期対応をして専門家に受け渡すにはどうしたらいいか?スタッフ間で意識を共有するにはどうすればいいか?といった観点から2006年にISLSコースというものが出来ました。これはImmediate Stroke Life Supportの頭文字をとったもので、脳卒中初期診療のシミュレーション講習です。現在、この愛知県ではISLS中部という団体を中心に2カ月に1度ほど講習会が開かれており、名古屋市立大学病院でも昨年8月に初めて開催され、幸い受講生の方々には好評を得ることが出来ました。今後も定期的に開催していく予定です。

写真:神経内科 三浦 敏靖

2010年8月開催されたISLSの様子



地域貢献・地域活動

私と母子保健活動 — 第32回母子保健奨励賞を受賞して—

林メディカルクリニック 林 弥生先生

このたび、第32回母子保健奨励賞を受賞いたしました。

この賞は“地域に密着した母子保健活動に長年携わり、これからもその活動が期待される55歳以下”の医師、助産師、保健士など15名(医師2名)に授与されます。授賞式ののち東宮御所にて皇太子殿下に拝謁する栄誉を賜りました。

私は大学院を含め名古屋市立大学産科婦人科学教室において7年間ご指導いただきました。現在は岐阜県中津川市にある産婦人科診療所(林メディカルクリニック)で開業医として周産期医療に携わっております。

中津川市は人口8万、島崎藤村の小説“夜明け前”の舞台になった山紫水明の地です。開業してからは診療だけではなく市主催の妊婦教室や女性の健康講座での講演、子宮がん検診などを通して母子保健に協力する機会が多くなりました。さらに積極的にかかわったことに、小学校での“いのちの学習”講座があります。きっかけは小学校4年生になった息子が理科の教科書を見て言ったひとことでした。“これ誰?宇宙人?”それは胎児の写真でした。赤ちゃんが生まれるという言葉は知っているけれど、生まれる前のことは何も知らないのだということに気づき、目の覚める思いでした。担任の先生にお話したところ、産婦人科医の視点から“性といのち”についてこどもたちに講演をと依頼され、“いのちってなんだろう?どうやって生まれてきたの?”というテーマで小学4年生全員に講演をいたしました。反響は大きく、その後各小学校で毎年講演を続けてまいりました。ところが平成18年頃から、この地域においても産科崩壊が加速化し分娩を中止する病院や診療所が続出し、現在民間の施設としては当院だけが唯一分娩や里帰り分娩ができる場所となっています。多忙となり地域に出向いて活動する時間がありません。このような状況で産科診療所として果たすべき役割は何かを考えた結果、母子保健の根幹である“お母さんが安心して出産できる”環境を維持していこうと決心いたしました。

名古屋市立大学で周産期医療を学んだ者として“すべての新生児が健やかに人生をスタートできる”をモットーに、胎児に寄り添う医療を心がけ新しい命をとりあげてきました。近隣の高次機能病院との連携作りを積極的に行い、母体搬送や帝王切開の相互援助を通して母児の安全に努めています。母乳育児へのサポート、助産師外来、赤ちゃん教室など妊婦さんへのケアの充実、インターネットやDVDを活用した情報発信も始めました。充実した出産と子育てには、医療側と母親の共通の理解が不可欠です。今後も母子保健に従事するすべての方々と協力し、安全で安心して出産ができる場を守っていくと同時に、よりよい出産のための思春期女性や母性の健康管理についての情報を発信していきたいと思っています。



桜山の懐かしのお店紹介 — 第8回 「洋菓子ボンボン」さん

お待たせしました!今回はレトロな雰囲気の人気ボンボンさんです。市大女子がレポートします。

昭和の喫茶店を再現したような、とっても懐かしいお店。秘書さんおすすめの、ボンボンはまさにそんな感じだ。古い看板に時代を感じながら店内に入ると、タイムスリップしたようでさらに驚く。一人でも行きやすい雰囲気のためか、お客さんもたくさん。メニューには自慢の本間製パン(ふわふわの食感が最高!)で作るサンドイッチやトーストもある。私はランチのカレーライスセット(カレー+サラダ+飲み物:750円)を頼んだ。あっさりとした豚ひき肉のカレーと半熟の味付け玉子の相性が抜群!ついで、デザートにとショーケース内のケーキを覗き込む。ほぼ200円台という安さに嬉しくなる。早速、おすすめのケーキ2つをいただく。お酒の風味が濃厚なサバラン、マロンクリーム上の砂糖菓子が絶妙な食感のマロンは、さすが雑誌にも載るだけあって美味しかった。また予約すれば超特大のバースデーケーキも作ってくれるという良しさ。素敵なお店を教えて下さった秘書さんに感謝した。

(取材:中口加奈子・大学院博士課程)



桜山の駅からすぐ。隣のボンボンセンターの路地も気になります。



お値段もウレシイボンボンのケーキ。食べたい〜





文部科学省 社会人学び直しニーズ対応教育推進プログラム 「名市大 医療・保健学びなおし講座」延べ1029名が受講修了証を取得

2008年12月より本格的な医療・保健分野の再教育プログラムとして始まった「名市大 医療・保健学びなおし講座」は、昨年12月末で今年度の講義が終了しました。実質2年間の間に、講義34科目(延べ510名の講師)を実施し、各講義15コマのうち9コマ以上の出席とレポートを提出した受講者に発行される受講修了証は、延べ1029枚を数えるに至りました。また、4科目8単位以上を受講し、試験に合格した場合に授与される履修証明書も、14名の方が取得されています。復職希望者のみならず現役医療従事者の受講も多く、これは、医療現場で常に最新の知識を求められていることによる再教育プログラムへのニーズが高いことを示していると思われます。昨年、受講者に対して行ったアンケートにおいて、この講座の継続を希望する方は90%にも及び、また、昨年11月に開催しました外部評価委員会において、「今までどこにも無かった抜群の規模と講義の質」との高い評価とともに、今後の発展に向けて多くの提言を頂きました。この度、大学本部のご理解により来年度も継続することになり、現在準備を始めています。

最後になりますが、「学びなおし講座」を実施するにあたり快く講義をお引き受けいただきました講師とコーディネータの諸先生、プログラム運営事務局委員、医学部事務室の皆様にご心より感謝申し上げます。

文責：分子神経生物学 教授 浅井 清文



感謝状贈呈式にて



履修証明書授与式にて

今年もフルマッチ(定員獲得)！ — 全国6大学病院のみしか達成できなかったフルマッチを 今年も名古屋市立大学病院は達成しました —

2年間連続フルマッチ(定員獲得)達成いたしました。しかも、今年では中間発表の段階で、充足率(=第1希望者数/定員数)が全国大学病院で1位となり、しかも、愛知県内の研修病院中、第1希望者数が1位！ダイヤモンド社発行の週刊ダイヤモンド(2010年8月14・21日合併号)での愛知県トップの評価につづき、全国の医学部生からも大変な人気を集める病院になりました。



写真：研修医室にて

研修医がそれなりの数がいると言うことが、明らかな病院のステータスであり、高い診療レベルを示し、さらには2年連続のフルマッチ(定員獲得)は、大きく名古屋市立大学病院が認められたと言うことでもあります。病院におよぼす様々な波及、経済効果は計り知れません。益々、名古屋市立大学病院の臨床レベルは向上されることに繋がることでしょう。

現在、40名近い研修医が病院で研修しています。また、来年度はその多くが、名古屋市立大学病院で後期(専門)研修を受けることになっています。来年もフルマッチのおかげで、40名以上の研修医が活躍します。そして、後期研修医も増えます。いよいよ、屋根瓦式の望ましい研修体制が名古屋市立大学病院でも形成されることとなります。研修医の指導は、総合内科を中心にしてすべての診療科が積極的に取り組みます。

来年度は、激しい競争になります。フルマッチ、そして愛知県内ナンバーワン研修病院をめざしたいと思います。総合研修センターは、研修プログラム作成、マッチングのみならず、医師のキャリア形成にかかわる関連病院との連携も進めていきます。初期研修にとどまらず、医師全体のキャリア支援を目指します。

文責：総合研修センター長(病院長補佐)
加齢・環境皮膚科学 教授 森田 明理

平成22年度ご寄附をいただいた方々

「市立大学振興基金(医学振興)」に、ご理解・ご賛同を賜り、誠にありがとうございます。平成22年度も多数の方々からご寄附をいただきました。お寄せいただいた寄附金は、教育・研究の推進に活用させていただきます。(順不同)

林 久嗣 様	加納 史朗 様	岡本 政廣 様
小早川 裕之 様	正木 恒男 様	鶴飼 徳正 様
加藤 栄史 様	山本 有司 様	神谷 博之 様
平光 伸也 様	田中 眞砂子 様	(順不同)

広報誌：瑞 医(ずい)
発行：名古屋市立大学大学院医学研究科・医学部
〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1
TEL(052)853-8077 FAX(052)842-0863

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp>

※次号の発行は平成23年6月下旬発行予定です。[年3回 2月・6月・10月]

**我こそは
通信員!**

広報誌「瑞 医」へ最新の話題をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp または医学部事務局 広報担当まで